＊卒業論文

女子大学生の子宮頸がんワクチン接種行動の関連要因
−看護系学生と非看護系学生を対象として−

○稲岡 菜月（静岡済生会総合病院），岩山 達成（静岡赤十字病院）,濱井 妙子（静岡県立大学）

I. はじめに

HPV ワクチンによって子宮頸がんの原因の 90%以上が予防可能で、世界では接種率が 80%以上の国もある中で、日本では 1%未満である [1)]。これは、2013 年 4 月に定期接種化された HPV ワクチンがわずか 2 ヶ月後に、厚労省から接種の積極的勧奨の差し控え勧告が出された影響とされている [2)]。近年、子宮頸がんの罹患者と死亡率は若年層で増加傾向にある。そこで本研究では、看護系と非看護系の女子大学生を対象に、HPV ワクチン接種行動と、HPV ワクチンや子宮頸がんに対する知識・認識、接種の意向との関連要因を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

2021 年 9 月に A 大学の看護系と非看護系の女子大学生 681 名を対象に、Web アンケート調査を実施した。調査項目は 24 問 55 項目で多肢選択法と評定法（5 件法）を用い、分析は HPV ワクチン接種行動と個人・家族・環境要因、子宮頸がんへの知識・認識を X^2 検定、t 検定、単変量ロジスティック回帰を行い、有意水準 5%とした。静岡県立大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

III. 結果

回答率は 46.2%で、学部別では看護系が 55.3%、非看護系が 27.3%であった。HPV ワクチンの接種状況では学部による有意差はなく「3 回接種」が 85 人 (27.2%)、「途中で接種をやめた」が 14 人 (4.5%)、「未接種」が 169 人 (54.2%)、「覚えていない」が 44 人 (14.1%)であった。接種群では 91.4%が公費対象期間に接種を受けており、接種理由では「母親に勧められたから」が最も多く、接種の判断に影響を及ぼした人物でも「母親」が 65.4%を占めた。学部別では知識得点(15 点満点)の平均値が、看護系：8.5±3.7 点、非看護系：5.2±3.9 点 ($p<0.001$)であり、認識では「HPV ワクチンは子宮頸がん予防に有効である」($p=0.004$) 、「HPV ワクチンは強制ではないので必要性を感じない」($p<0.001$)、「子宮頸がんによって子どもが産めなくなることは自分にとって重大な問題である」($p<0.001$)で、いずれも看護系の方が肯定的であった。接種の有無を従属変数とした単変量ロジスティック回帰分析の結果、「学年 (1～3 年・4 年)」(オッズ比:16.03) 、「副反応報道」(4.68)、「接種の判断に影響した人」(3.75)、「将来の娘への HPV ワクチン接種の意向」(3.42)、「母親の職種 (看護系・非看護系)」(2.76)、「積極的接種差し控え勧告」(2.42)、「知識得点」(1.17)、「認識」の「HPV ワクチン接種の判断をするための情報は十分に発信されている」(1.39)・「HPV ワクチンは子宮頸がん予防に有効である」(1.71)・「自分は将来子宮頸がんになる可能性がある」(0.71)・「HPV ワクチンの副作用が心配である」(0.41)などの 8 項目で有意差が見られた。

IV. 結論

HPV ワクチン接種行動への影響度が最も大きい要因は、積極的接種差し控え勧告時における学年で、接種対象期間には母親の影響が大きく、女子大学生では接種経験の有無や子宮頸がんに関する知識、認識が接種行動に対して肯定的にも、否定的にも影響を及ぼすことが明らかになった。

V. 文献

1) 日本産科婦人科学会 (2020). 子宮頸がん予防についての正しい理解のために, Part1 (2020 年 7 月 21 日) http://www.jsog.or.jp/modules/jsogpolicy/index.php?content_id=4, (参照 2022 年 7 月 20 日).
2) de Figueiredo,A.,et al(2020). Mapping global trends in vaccine confidence and investing barriers to vaccine uptake:a large-scale retrospective temporal modelling study.Lancet,396,898-908.